

## 東京府立第六高等女学校 丸山丈作

……そういえば、あの学校の校長になったのは大正十二年の四月ですから、四十年ももっと前の事になりますね。

つい、こないだのここのような気もするんですが、考えてみれば、いつのまにかもう九十で、ま、昔ばなしのつもりできいてください。

そうです、私は四十九才で、はじめて校長になったわけです。校長になるのが出世だとしたら、ずいぶん出世がおくれたほうで、同期の友人たちはもうとっくに校長になっていたものです。

しかし、校長になるまで、おなじ府立でしたが、べつの女学校で、教頭をしておいてね、この女学校の十五年間が私にとっては、いろんな意味で、たいへん勉強になったとおもっています。

それに、こんどはじめて校長になった学校が、やはり女学校で、そのときはじめて新しくできた学校でした。おなじ校長になるにしても、これが古い学校だったら、それまでの、いろんなしきたりとか、伝統とか、校風といったものもあったでしょうし、先生方も古い人が何人もいたでしょうし、いくら校長だからといって、そう、自分のおもうようにはならなかったとおもいます。その意味では、運がよかったともいえるでしょう。

もっとも、学校ができたといっても、はじめのうちは、じつは、校舎もなんにもない学校でしてね、あの時分はたいていそうでした。学校ができて、校長も先生もきまる、生徒も入ってくる、それなのに学校の建物ができるのは一年も二年もあとになるというふうで、のんきといえはのんきなものでした。

そんなわけで、その学校も、じっさいに校舎が一棟でき上ったのは、あくる年の大正十三年九月でした。つまり、校舎ができるのは一年半もあとだったわけで、それまでは、私が教頭をしていた古い学校の校舎を間借りして、授業をつづけていたのです。

### 生徒のインクは化学の先生が作って教室に備えておく

いよいよ、一棟だけでしたが、校舎ができあがって、ひっこしする、それがちょっとおもしろかったですね。

いまもそうでしょうが、府立の学校などというものは、金がありませんでね。校長の仕事といえは、まるで金のやりくり算段をすることみたいだ、といえるくらいですが、そのひっこしのときも費用がないんです。むろん、よその学校にご厄介になっていたのですから、黒板とか、机とか、そんなものは借りもので、べつに持ってゆくわけではないのですが、それでも先生がたの椅子だとか、本立てだとか、いろんな書類だとか、生徒の傘だとか、まあなにやかや、やっぱり一年半もたってみれば道具があるものです。

生徒の傘ですか。これは置き傘でしてね、にわか雨というのがこまるんですよ。生徒がぬれて帰る、かぜでもひくという心配もありますし、それでなくても授業中に雨が降ってくると、生徒はそわそわするし、家のほうでも傘を持ってゆかねばならない、といったいろんなわずらわしいことがあるものですから、学校の費用で貸し傘を用意してあったんです。番傘で、学校の名前が大きく入っていましたがね。

ところが、紙の傘というのは、どんなに注意しても、破れたり、いたんだりするし、いまいったように苦しい予算でやりくりしているんですから、どうもじゅうぶんな数をいつも用意しておくわけにはゆかない、それでのちには木綿のコーモリ傘を、入学のとき生徒にかならず一本ずつ買わせて、それを学校にいつもおいておくようにしました。たしか一円だったとおもいます。その傘には、大きく入学年度と名前を書くようにして、廊下にその置き場をつくって、いつもそこへおいておくようにしたんです。

いったい、学校は勉強をしにくるところですから、生徒にそれ以外の無用の神経はなるたけ使わせたくない、とおもいましてね、置き傘もそうですが、インクなどもそうでした。

あのじぶんはもちろんボールペンもなし、万年筆も、まだ女学生がみんな使うという時代ではなくて、ノートをとるのも、みんなペンをインクつぼにつっこんで書いていました。

ところが、インクつぼは、どうかすると持ち歩いているうちにこぼれる、あるいは生徒によっては忘れてくることもある。そんなことで、インクはぜんぶ、教室のきまった場所に、生徒の数だけ用意しておいたんです。学科によっては別の教室へいかなければならない、そういうときもインクを持ち歩かなくてすむように、どの教室にも生徒の数だけインクを用意しておいたのです。

もったも、これだけのインクを、いちいち買う予算はとてありませんから、これは化学の先生につくってもらったんです。さあ、それほど上等なインクではなかったかもしれませんが、それでも毎日の勉強にはじゅうぶん役に立つはずで、そのかわりインク代というのは、生徒からは一銭もとりませんでした。

なくなると、化学の先生のところへ行って、新しくつめてもらう、まあ、つくる先生のほうはご苦労でしたが、しかしいちどにたくさんつくっておけばいいんですから、そんなことでつまらん神経を使わなくてもすむならば、いいじゃないかという考えでした。

話がとんでしまいましたね。そんなわけで、新しい校舎ができた、ひっこしをしなければならないが費用がない。しかし、さいわいなことに黒板とか机とか、そんな大きな荷物はなかったの、これはひとつ、みんなで運ぼうじゃないか、ということにしたのです。生徒も先生もいっしょになって、みんなで手わけして、新しい学校へ運んでゆこうというのです。

それまでご厄介になっていた学校は、麻布の北日ヶ窪というところにあったのですが、こんど新しくできた学校は、三田の慶応の近所です。そこで、北日ヶ窪から麻布十番を通って、二の橋を渡って坂を上がってゆく、さあ、距離にして半道、二キロくらいものでしたか、そこをみんなで二回も三回も往復して運んでいったというわけです。

いまなら第一、自動車があぶなくて、こんなこともできないでしょうが、なんといっても、よその学校に間借りしているというのは、先生もそうですが、ことに生徒にはいやなことだっただろうとおもいます。それがいよいよじぶんたちの校舎ができる、そのひっこしをするということで、みんなじつにいきいきと、よろこんではたらいたものでした。

## 文部省のための学校か、それとも生徒のための学校か

勉強も大切だが、体も大切です。いくら勉強しても、体が弱ければ、その勉強はなんの役にも立ちませんからね。

この新しい学校の校長になって、私がまず考えたのもこのことでした。というのは、そのじぶんでも、学校では、とかく体育のほうは二の次といったふうがあったからです。

たとえば、おなじ先生にしても、体操の先生は、国語や英語や数学や、そういった学科

の先生にくらべると、なんとなく序列が下のように入れられがちなもので、そのころの公務員の待遇でいうと、奏任官、つまり高等官の先生は、たいてい、そういった学科の先生でした。体操の先生で奏任官待遇などという人は一人もなかったのです。

これではいかんとおもいました。これではいくら体が大切だといっても、先生からして、その気になるわけにいかない、そこで私は、体操の先生をいきなり、奏任官待遇にしたんです。

それまでそんな例はなかったのですから、これには他の先生たちもおどろいたらしく、なかには、それじゃ私はいったいどうなるんです、と不平をいいにきた先生もありましたが、なに、私は押し切ってしまいました。もっとも、先生方もすぐに私の気持ちはわかってくれて、あとべつにどうということにはなかったのです。

体育の教科書も作りましたね。そのころ、文部省に検定試験というのがあって、体操とか家事とかそういうのは、検定試験の課目になかったのです。

検定試験にない学科は、まあ、本物じゃないというのでしょうか、教科書はいらない、というより、使ってはいけないということになっていました。

しかし、体操は週に三時間もやっているのだし、ただ手を上げたり足を動かしたりするだけなら、それは猿まわしの猿が芸をおぼえるようなもので、そんなことではいけない。むかしのことばで「物アレバ即チ法アリ」ということがあります、学校で教える以上、体操だって、ちゃんとももの道理を教えなければいけない、それには教科書がいるというわけです。

そこで、私がおもに理論のほうを受けもち、さっきの奏任待遇にした体操の先生に実技のほうを書いてもらい、もうひとりの先生に、体操についての、いろんなエピソードのようなものを書いてもらって、それで教科書を作りあげたのです。

案の定、文部省のほうでは、そんなものを作ってはいけない、生徒には使わせちゃいけない、とやってきたのです。しかし私としては、いまいったような気持ちですから、なに、かまうもんか、やれ、とやって、生徒に全部使わせました。文部省が大事か、生徒の体が大事か、というわけです。

体操の先生の数もふやしましたね。たしか、そのころ女学校の体操の先生の定員は四人だったとおもうんですが、それを五人にしたんです。

放課後、生徒はまっすぐ家に帰る子もいますが、残ってなにか運動していく子もずいぶんいる、まあおもに遊戯みたいなものですが、それをみていて、気がついたのは、生徒はそうやっているけれども、課外だから、先生がついていないんです。おなじやるんなら、先生がついてちゃんと指導すれば、もっと効果がある、そう考えたんです。

しかし、定員だけの先生では、なにしろ一週間に三時間、どのクラスももっているわけですから、とてもそれ以上、課外の指導までやれというわけにいかない、そこで定員を破ることは承知の上で、もう一人、ふやしたんです。

なにもまちがったことをしている気持はないんですが、とにかく定員というものを破ったんですから、それでとやかくいわれるんならばあやまろう、あやまっても駄目なら、もう校長なんかやめて、くにへ帰って百姓をしようとおもったんです。さいわいに百姓はしなくてすみましたがね。

そのあとも、これが通らねば辞表を出そう、とおもったことは何回もありましたが、それがどうしたことか、十八年も校長として勤めてしまうようなことになってしまいました。

こういうことをいってはどうかとはおもいますが、世の中にはいろんな法律とか規則とかいったものがありましよう。たとえば刑法のように、人を殺してはならんとか、傷つけ

てはならんといった法律は、これはどんなことがあっても守らなければならないとおもいます。

しかし、こと教育については、規則や法律のほうが、どうも遅れていることがあるんです。それを規則だから、なんだからといってとらわれていると、ほんとうにいい教育なんてできるわけはありません。だから道理にあわない無茶はいけません、自分が正しいとおもったら、少しぐらいよけいなことをやったって、さしつかえないんだ、あの学校で十八年間校長しているあいだ、いつもそういう気持で、私はやってきたつもりです。

## 入学試験の課目に体操もあってこの点がわるいと落す

入学試験はどここの学校でもやることですが、うちの学校では、この試験科目に体操を入れたのです。

もちろん、答案用紙に答を書くといった試験ではありません。体が丈夫かどうかをじっさいにしらべる試験です。だから、走らせてみたり、体操をやらせたり、歯もしらべる、眼もしらべる、いろんなことをしらべて、もちろんそれが点になるんです。

だから、いくらほかの学科の点がよくても、この体操の点がひどく悪いと、やはり総合点が低くなるから入れないといったこともあるわけです。

むかしから教育のほうでは、口では体育、知育、徳育なんていうんだけど、じっさいは、さっきいったように体育のほうはいい加減なんです。それで、私としては、体育も大事だということがありますから、こういう試験も課目に加えたのです。

これをほかの学校の先生に話をすると、それはそうだが、しかし体のことは、どうしていいとか悪いとかわかるか、というんです。私にいわせると、むしろ学科のほうは、その日一日の出来不出来できまることでしょう、それでほんとうのことがわかるかどうかは、むつかしいけれども、体のほうは、ちゃんとしらべればわかるんだ、そういうわけで、これは点数に入れたんです。

私は世の中のことはなんでも、時がたつにつれてだんだんよくなっていくんだとおもうたちなんですがね、どうもこの体育のほうは、昔も今もあまりかわらないような気がします。いま入学試験に、体のことが課目になっている学校はないんじゃないでしょうか。もし体のことも点数に入るとなったら、もうすこしこどもの勉強のさせ方もちがってくるのではないかとおもいますがね。

もったも、世間には、かんちがいするひとがあつて、そんなふうに入學試験にも体操がある、それと、当時、田町の駅を下りる女学生はずいぶん多かったです、そのなかでうちの生徒だけは、一目でわかるといわれたものです。歩くときの姿勢がじつに立派だ、上体をしゃんと起こして、サッサッと歩く、そういうことがありましたから、どうもあの学校へ入るには、よほど体がよくなくてはいけないんだらうというひとがあつたわけです。

しかし、そういう試験をしたのは、なにも特別に体のいい子だけをえらぶという意味ではなくて、まずふつうに健康で、日常の仕事がやってゆけるかどうかというところが、目安だったのです。だからうちの生徒が姿勢がいいとか、歩き方がきちんとしておるといわれたのは、なにもはじめから、とくに体のいい子だけを入れたためではなくて、学校でそういう訓練をやったからなのです。

体を丈夫にするという基本は、なんといっても歩くことでしょうね、だから、それについては、歩きかたももちろん、そのほかいろいろと、気をつけてやったものです。

## 定期試験はない、一学期一度の試験でなにがわかるか

試験といえば、いわゆる定期試験というのはやりませんでしたね。

学期の終わりに、何日か日をとっていろんな学科の試験をやる、あれを一切やめたのです。

だいたい私は、学校は勉強するところ、だから学校でしっかり勉強していたら、家へ帰ってまで、なにか勉強したりしなくてもいいんだ、それを先生方にも生徒にも、よくいったものです。学校は勉強するところ、家はそうでないところ、そう思っていればいいんです。

それだけに、学校にいるときはしっかり勉強しなければ、よそ見をしたり、となりの席の子と話をしたり、そんなことではダメなんです。授業時間中は一生けんめい勉強に打ちこむ、それさえしておれば、べつに家へ帰ってまで勉強する必要はないんです。家へ帰れば、家の用事もいろいろあるだろうし、遊ぶということも大切なことなんです。

いまの学校といっってはわるいが、どうも少し、勉強しすぎるんじゃないありませんか。学校でも余分に勉強して、家に帰ってまた勉強して、それでもたりなくて、またほかの先生を雇って勉強している、などという家もあるようですが、私はそういうことはきらいなんです。定期試験をやらないというのも、つまりはそのためなんです。ああいう試験のやり方をすると、どうしても試験のために勉強しなければならんでしょう。

それに、一学期に一回の試験で成績をきめるというのもおかしな話ではありませんか。入学試験なら仕方がないかもしれませんが、毎日毎日教えているこどもが、どれだけ勉強ができたかを知るのに、たった一回の試験できめてしまうというのは、どうも賛成できないのです。

よく勉強したこどもでも、そのときの、その問題だけ、なにかのことでできなかったということもあるでしょうし、ふだん学校であまり勉強しない子でも、たまたまその問題ができたからといって、いい点がつくというのもおかしなものです。

しかし、試験が全然なかったわけではありません。教えるほうとしては、どれくらい勉強したかを知る必要がありますから、そのやり方は先生にまかせましたが、とにかく試験というものはあったのです。

ある先生は、授業のうち十分か十五分をさいて、今日教えたことを書きなさい、というやり方の人もあるし、人によっては、何日かまとめて、いままでやったことをしらべる、という試験をしていた人もあったようです。

そんなやりかたでも試験は試験ですから、採点をしなければなりません、採点については、先生方に、あんまりこまかいことはいふな、としょっちゅういったものです。

先生というものは、なにしろ自分がちいさいときから何点何点と点をつけられて育ってきたでしょう、だからいざ自分が先生になって生徒の採点をするときも、つい何点ということになるんですよ。

しかし、じっさいに考えてみると、この点数というのはつけにくいんですね。はやい話が、ここに四十八人なら四十八人、ひとクラスの生徒がいる、ふつう点数というのは、十点満点で0点から十点というふうにつけるわけですが、その基準はなんだということですね、答案ができてなければ0点、ぜんぶできておれば十点、ということでしょうけれども、しかし学力をはかるのに、全然なにもできないこどもというのは一人もいないんです。

そうすると、0点というのは意味がない。また十点のほうにしても、ほんとうはもっとそれよりできる子がある、十一点にも、十五点にも、二十点にもつけなければならん子もいる。そうかとおもうと、やっと十点の子もいる。それがぜんぶ十点というのも、どうも

おかしな話だし、あるいは九点と十点とでは、学力でどこがどれくらいちがうんだときかかれても、これはちょっと返答にこまるでしょう。

そこで、そんなこまかい点をつけるのをよそうといたんです。といって全然なにもつけないのでは見当がつかないから、それではおおざっぱに甲乙丙丁ぐらいにしよう、甲というのは、よくできたもの、乙はふつう、丙はすこしできない、丁はもうレベル以下ですね、それくらいでいいんじゃないかということなんです。

## 一番と二番の差は誰も説明できないから席次はつけぬ

甲乙丙にすると、そのほかにもいろいろとぐあいのいいことがあるんです。たとえば席次ですが、よその学校ではよく一番だとか、二番だとか、五十番だとかいっているでしょう。しかし、あれも私にいわせるとヘンなものなんです。

一番と二番は、どこがどうちがうんだ、うちの子は十番だが、十番とはどういう意味なんだ、と親にひらきなおってきかされたら、返事のしようのないものです。

あれは点数を多い順にならべて、一点でも多いほうが一番、そのつぎが二番ということで、一番と二番は、だから学力の点でどうだといわれたら、まったくこまるわけですね。それというのも、採点を十点法でやるから、数字で出てくる、つい一点でも多いほうを上置く、ということになるわけでしょう。これが甲乙丙丁だと、甲だって何人もいるし、乙だって何人もいる、その何人もいる甲のうち、どれが一番か、どれが二番かということは、きめようがありませんからね。

それで、うちの学校には、席次というものはいっさいないんです。

平均点というのも、なかったのです。あれもつまらんことですね。かりに三学期あるとしたら、一学期の点と、二学期の点と、三学期の点をあわせて三で割る、それがその学年の成績だというのですが、私にいわせると、これも意味のないことです。

このやり方では、一学期はずいぶんよく勉強したが、二学期はそれほどでない、三学期は大分なまけたという生徒も、それと逆に、一学期は大したことはなかったが、二学期は少しよくなった、三学期はずいぶんよく勉強したという生徒も、そのちがいがはっきりしなくなります。勉強というのは、毎日毎日の積み重ねですから、まえよくできた、一学期はよく勉強したということは、たいして問題にはならないので、今日どうか、ということが大切です。それがこの平均点というやり方では、どうもはっきりしないわけです。

その点、大ざっぱに甲、乙、丙にしておけば平均点もだしようがないし、そんなわけで、平均というものもなかったのです。

## 通信簿もなかったが、その方がかえってよく勉強した

通信簿というものもありませんでしたね。全然なかったわけではありませんが、よその学校のように、学期の終わりになると生徒にひとりずつ持たせて帰して、親に見せるというのはやりませんでした。

親のほうから、どうしても自分のこどもの成績を知りたいというときは、封筒に自分のところを書いて切手を貼ったものを、学校へ届けておく、そうすると、先生がそれに成績を書いたものを入れて送るということにしていたのです。だから、そんなものは見なくてもいいという親は、見ないでもすんだわけです。

そういうことをしたのは、ひとつには生徒としては、しょっちゅう勉強具合をいろんな

方法で試験されていますから、自分はできたか、できなかったか、よくわかっている筈だからです。わざわざ通信簿にして見せるというのは無用の劣等意識をもたせたり、必要以上の競争心を駆りたてたりしてこまります。

もっとも、親としてみれば通信簿もない、席次もない、平均点もない、点数も大ざっぱに甲、乙、丙だというのでは、すこし心配だというひともあったようです。

入学式のとときに父兄を集めて、学校のこういった方針を説明するのですが、あるひとが、先生の気持ちはよくわかるし、まことにりっぱだとはおもうが、なにしろこどもというのは遊びたい盛りである、それを試験もない、席次もない、点数もないというのでは、勉強しなくなるのではないかという質問をしたのです。

それに対して私は、その点は大丈夫です、ひとりで勉強してるのではなくて、何十人もおなじような年頃のこどもが、一つの部屋で勉強しているのだから、ほっておいても、みんな勉強します。しかし、もし勉強しないようだったら、そのときになって考えさせてください。それからだっておそくはないんです、と答えたのです。

じっさい、私が校長をしていた十八年間、ずっとその方針でやってきたんですが、そういった心配は一回もおこりませんでした。むしろ、勉強しすぎてこまったくらいです。

それはそうかもしれませんが、一学期に一回の試験なら、ふだんは遊んでいてもすむかもしれませんが、しょっちゅういままでもやったことを試されるんですから、それにはもう試験勉強などというものはまに合いません。毎日の授業をしっかりと受けるという以外にはないわけです。

だから、そのころでは、女の子は上の学校へ行くといっても、いまのようにどこの大学へでも入れるというのではなかったから、女高師あたりがせいぜいのところでしたが、その入学率なんかも、うちの学校はよかったですね。

女高師といえば、入学試験のまえに、お茶の水から電話がかかってくる、あなたのところの生徒には平均点も席次もないが、一体どうしたことだと聞いてきたわけです。

そこで私が出向いて行って、こうこういうわけでうちの学校では、平均点も席次もつけないんだと説明したんですが、むこうとしては、それではどうにもほかの学校との釣合い上こまるというのです。しかし私は、ほかの学校がどうか、事務的な手続きがどうかということで、うちの生徒全体の教育方針を曲げるということは、校長としては、どうしてもできないと頑張ったんです。それで先方も折れて、そんなわけならまあお宅だけではなくてもいいことにしておきましょう、といってくれたのですが、なくてもよかろうが悪かろうが、うちはそういうものはつけないんだから仕方がないといって帰ってきたのです。

もっともそれからあと、ほかの学校からも同じようなことをいつてくるものですから、入学の手続きの書類には、べつに手紙をつけて、当校では、平均点も席次もつけない方針だということをいいそえてやることにしました。

## みんながよく勉強するのでついていけない子ができた

勉強しすぎてこまったことのひとつとして、それは大ぜいの生徒ですから、なかにはついていけない子がいます。つまり、甲、乙、丙、丁でいえば、丁という評価をするより仕方がない、ほかの生徒にくらべてがたんとおちるという子も、ときたまないことはなかったのです。

いまおぼえている例では、学校へ一週間以上もこない、つづけて休んでいる、べつに病氣という届もでていないという子があったのです。それで担任の先生に家庭訪問をさせた

のですが、両親というのは、父親もそのような教育を受けている、母親もたしか、女高師なんかをでて教育には熱心だという人でした。

担任の先生が先方の家へいったところが、母親はおどろいて、家の子はしかし毎朝、学校へ行っているというんです。いや、そんなはずはない、このところ、ずっと休んでいるんだ、と説明しても、母親は、どうも信じられないといった様子です。するとそこへ、当の生徒が、ただいまといって帰ってきたわけです。

担任の先生が、きているのを知って、その子の顔色がさっとかわる、そこで、母親にたのんで、しばらくその子と二人きりにしてもらって、事情をきいてみたというんです。その子がいうには、どうも勉強ができない、みんなが答えられるようなことが、自分には答えられない、それで、学校へ行くのがいやでいやで仕方がなくて、とうとう学校へ行くような顔をして、毎日出かけたけれども、じっさいは、公園だとか、百貨店へ行って、屋上で弁当をたべたり、そんなことをして時間をつぶして、学校のおわるころをみはからって帰ってきていたのだ、というのです。

担任の先生が、どうしたものでしょう、というものですから、私としては、このままリヤリに学校へこさせてみたところで、そういう気持はますます深くなるばかりだし、それでは結局落第というようなことにもなってしまいうし、もしそういうことにでもなれば、一生その人は「自分は学校ができなかったんだ」とおもって、いつもひきめを感じながら暮らさなければならぬ。しかし、その子は、たまたま、こういう、みんながよく勉強する学校へ入ってきたから、ついていけないんで、世間には、その子の程度でも、じゅうぶんついていける学校もあるはずだから、そっちへ転校したほうが、むしろその子のためにはいいんじゃないか、そういったんです。

それを、担任の先生が、両親に相談すると、両親もなっとくして、母親などは、「私が自分のこどもの力をよく見きわめないで、ただ勉強しろ、勉強しろ、ということばかりをいったものだから、こどもにあんなおもいをさせてしまった」と反省してくれた、ということです。

それで、私がしかるべき学校へ行って、事情をいって転校の手続きをとるようにしましたが、あとで聞くと、その子は、そっちの学校へいってから、見ちがえるように顔つきなどはればれとして、成績もよくなって、卒業してからもいい奥さんになっているという話です。

こういうことから考えても、学校の席次とか平均点とか、成績というものも、あまりむきになってこどもにおしつけるのは考えものだ、とつくづくおもうのです。

## 校医が毎週教室をまわって生徒の顔色をみてあるいた

そんなふうで、通信簿というものは持たせてやりませんでした。体育簿というのがありますね、これは毎週毎週、自分の体のことを生徒が自分で書く、それを一週に一度、先生のところへ出す、先生はそれをみて、その生徒の体がどうなっているか知る、というような意味のものなんです。

ありがたいことに、そのころ校医をしていたお医者さんがとても熱心なひとでした。ふつう校医といえば身体検査のときに顔をだすぐらいのものですが、この校医はしょっちゅう学校へやってきて、体育簿をみて、体の調子が少し悪いなという子がいたら、先生がこの校医に連絡する、すると校医は授業中の教室をじゅんじゅんに生徒の顔色をみてまわる、というわけです。生徒はお顔拝見などといっていたようですね。そして顔色をみて、



少し調子が悪いんじゃないかという子がいると、あとで医務室へ呼んでいろいろきいたり、体をみたりしてくれたもんです。

どうも古風ないい方で恐縮ですが、私はいつも「草根木皮ハコレ小薬、飲食衣服ハコレ大薬、薬源ハコレ治心修身ナリ」そういうことを考えているんです。まあ平たくい直すと、病気になったから薬を飲もう、なんていうのはいちばん下の下。もう少しましなのは、たべものや着るものにふだんこまかく神経を使って、病気にならんようにする、これが大薬だというわけです。

しかし、それよりもっと大事なことは、心をおだやかにして、いつも神経をとがらせないように気をつける、ということです。あいつは憎いとか、あいつは可愛いとか、そういうことをしょっちゅう考えているのが一番体によくはない、さっきいった試験や点数のことなども、結局、そんなことを年じゅう気にしていたんでは、体を悪くするだろうという気持ちもあったのですね。

そんなわけで、この体育簿は、通信簿よりも大切に考えていたんです。それに女の子のことだし、そういう体のこともよくわかるし、それと歯を大切にしなければいかんとおもって、年に二回、学校で歯の検査をしました。そして、校医とはべつに、歯医者もたのんで、その検査の結果、虫歯があるとか、歯槽膿漏だとか、とにかく歯に故障のある生徒は、それを親にあって、自分の知り合いなり、近くのお医者さんで治すか、それとも学校で治療するか、ということ聞いてやるわけなんです。

学校で治療してほしいといった場合は、その歯医者さんが治療するわけですが、その治療は授業に優先させたものです。

つまり、授業中であろうとなんであろうと、治療の順番がきたら教室を出てよろしい、そしてすぐに歯の治療を受けなさい、ということにしてありました。定例の検査のとき以外でも、いつでも歯が痛くなったら、授業をやめて治療を受けてよろしいということにしておいたわけです。

## 年に二回は四十キロの遠足を敢行して体力を鍛えぬく

新しい学校ができて、はじめて私が校長になった年の九月一日に、関東大震災がありました。

あの震災は私にもいろんな意味でショックでしたが、なかでも、強く心を打たれたのは、被服廠跡で何万人という人が死んだという、あのことです。その人たちのなかには、もう少し歩けば上野の山なりなんなり、安全なところへ避難できたのに、疲れきってしまって、つい手近な被服廠跡へ逃げこんで、そうしてそこでみんな焼け死んだのです。

それをみて、女だから、歩かないでいいという、これまでの教育はまちがっていた、と心底からそうおもいました。こういうとき、日ごろから足を鍛えておけば、あの被服廠で死んだたくさん女の女の人だって、死ななくてすんだにちがいない、うちの学校でもなんとかして足を鍛える訓練をしなければならぬと、そう感じたのです。

そのうち、鹿児島の方へ視察に行ったところが、ある女学校では、例のタバコで有名な国分というところまで、だいたい八里ぐらいの道のりだそうですが、その距離を歩いて遠足をしている、それは生徒の足を鍛えるためだというのです。

私は、これだ、とおもいました。そこで帰ってくると、すぐ大宮の氷川神社まで、距離にしておよそ二十五、六キロ、これを歩く遠足をやりました。年一回ということにして、つぎの年は、厚木へゆき、そのつぎは藤沢へ行きました。

しかし、こんなふうに毎年行先をかえると、そのたびに、いくらか歩く距離にも差がでてくる。それよりも、むしろ、毎年一回のことだから、コースをきめて歩くようにしたほうがいいとおもったんです。

それにはどこがよかろうか、といろいろ考えた末、多摩川の土手がよかろう、ということになりました。というのはここだと途中にいくつも、東横線だとか、玉電とか小田急だとか、京王線だとか、何本も電車が通っている。だから、中途までしか歩けないこどもも、その電車の通っているところを一つの区切りにしておけば、そこから電車に乗って帰ることができる、そういう便利さがあったからです。

そこで多摩川園を起点にして、まず上流のほうへむかって土手を歩いてゆく。そしてむこうへ行きついたら、こんどは反対側の土手をまた多摩川園まで帰ってくる。その往復の距離がちょうど十里になるように、途中でわざわざ寄り道をしたりして、コースをきめました。そして中途の区切りとしては、三里、五里、七里、という地点を作って、十里歩けるとおもうものは十里歩きなさい、しかし、どうも無理だという人は、自分の足の力に応じて、三里なり、五里なり、七里をえらびなさい、ということにしたのです。

まあ、そんなふうに、自分の体力に応じて距離をきめるやり方ですから、これを「適応遠足」というふうによんでいました。これはずっと毎年つづけてきたものです。

一口に十里といっても四十キロですからね、これは女の子でなくても、そうラクではなかったですよ。

最初の年は十里を歩きとおした子が、全校千二百人のうち三百人たらずでした。しかしえらいもので、のちには八百人以上の生徒が、十里の道を歩きとおしましたからね。訓練というものはやはりありがたいものだとおもいます。

のちには年二回にしました。朝七時に集合してそれから歩きだすんですが、十里歩くと夕方の五時になりましたね。私はいつも十里の組に参加して、先頭で歩いたものです。もっともそういうとこきこえがいいが、ほんとうは列を組んで歩くときは先頭がいちばんラクなんですね。疲れたとおもえば自分で歩度をゆるめることができるし、あとからついていくほうはそうはいきませんからね。

しかし、当時でもう五十を過ぎていたわけですから、よくまあ歩けましたねえなどといわれるんですが、それほどつらくともなんともなかったですよ。もともと私は山へ登るのが好きで、毎年槍ヶ岳などへは生徒を連れて登っていましたし、むしろ先生方のなかには、私よりずっと若くてもふうふういつている、それも、ほんとうは五里ぐらいなんだけれども、五里というとな女の先生ばかりだから仕方なしに七里組に入った、などという先生もありましてね。

## おかげで戦争中も都会の女に珍しく何里もあるけた

歩くということではそのほかにもいろいろやりました。たとえば、寒中に目黒駅を起点に、千足から丸子の渡し、それから池上の本門寺、大森駅というコースで、耐寒訓練というものもやりましたし、それから月に一回、やはり歩く遠足をやりました。まあ夏休みとかそういうときはできませんから、年にするとこれが十回、少ない年でも九回はやったわけです。

この遠足には、もう一つべつの目的もあったのです。というのは、小さな町ならいざ知らず、東京のような大きな都会になると、自分が住んでいる都会の端のほうが多くなっているのか知らないひとが多い、それで毎月行先を変えて、あっちのほうへいった

らこういうところがある、こっちへいったらこんな場所があるとういうことを、生徒に知らせようというわけだったのです。

だから、このほうはべつに何里というふうに一定のきめはなく、そのときによって今月はどこへ行こう、来月はどこへ行こうというふうにしていったわけです。

戦争がおわってからうちの卒業生に会うと、この歩く訓練のことが話に出ましてね、疎開先や買出しなどで田舎へいく、これから相当なものを背負って駅までいかなければならない。道のりを聞くと二里半だとか五里だとかいう。たいていの女の人ならまいってしまうんだけども私たちはあの適応遠足のおかげで二里半といえば、ああ、あれくらいだ、五里といえばあれくらいだという見当がつくし、それならじゅうぶん歩けるという自信もあった、それでずいぶん助かった、そういって感謝されたものです。

しかしいちばん感謝しなければならないのはこの私かもしれません。というのは、九十のこの年になっても、まだ立派に毎日歩けるんですから、これもあのときの十里を歩き通した訓練のおかげだろうとおもっています。

遠足では、お菓子や果物などをいっさい持ってゆくことを禁止しました。これはひとつには、家庭に負担がかかってはわるいということもありましたが、ただ歩くだけでなく、そういうことも我慢しなければ、という気持もあったわけです。

## 女の子は卒業すると出られないから修学旅行は遠方へ

いまはすこしは事情がちがうかもしれませんが、そのころは、ことに女の子は、学校を卒業してしまうと、もうあまり旅行にはいけなかったものです。いけるようになれば、年とってからのことで、おばあさんになってからでは、同じものを見てもやはり受けとりかたが若いころのように鋭くない、どうしても学校にいるあいだにいろんなところへ行ったほうがいいとおもったのです。

そこで毎年、一年はどこへ行く、二年はどこへ行く、三年は、四年は、というふうにきめていました。それも一年生は日帰りでしたが、二年生からは泊りがけで日光あたりへ行ったものです。最後には、八泊九日、十泊などという年もありましたね。関西から九州、あるいは北海道あたりまで、でかけていったんです。

それはいいんですが、けっきょく問題は旅費ですよ。そう何十円というものをいつときに出せといわれても、親のほうでも困るでしょうから、そこで毎月旅行用の積立貯金を生徒にやらせたんです。それで一週間も十日以上もの長い修学旅行にほとんどぜんぶの生徒が行けたわけです。

行くのは、毎年六月のはじめでしたね。というのは、六月から汽車の団体割引が、はじまるんです。学割が二割、その上に、その六月からは半額になるんで、それを利用したというわけです。

旅行にゆくときは、みんなリュックをしょわせましてね。というのは、手さげかばんやポストンバッグのようなものでは、いつも両手がふさがるでしょう。これでは、いざ、というとき、なにかと不自由ですから。

いつかも九州へ行ったとき、どこでしたか、乗り換え時間が二分しかなかったんです。もっとも、その当時の汽車は、いまとちがって、時間の点では正確無比でしたから、汽車が遅れて乗り換えにまにあわないといった心配はありませんでしたが、問題は生徒のほうです。はたしてこれだけ大ぜいの生徒が、二分間でひとりも乗り遅れないで乗り換えられるだろうか、それを心配する先生があったわけです。

いよいよ、その駅に着いた、さあ、乗り換えだ、というと、生徒たちはまえもって汽車の中で、荷物をすっかりリュックにつめて、それをしょっている。汽車が着いた。いっせいに生徒が降りて、反対側のホームへ移る。じつに、みごとなものでしたよ。一分もかからないで、みんな無事につぎの汽車に乗れました。これもリュックなればこそで、ポストンバッグなど下げていたんでは、どうなったことやらわからなかったでしょう。

## 外国航路の一等にのせたために新聞で非難攻撃される

北海道へ行ったのは、ずっとあとのことで、はじめのうちは、私は京阪地区を考えていたわけで、それから足をのぼして九州ということになったんです。

というのは、その頃、知人に日本郵船の旅客課長がいましてね。なにかの話のついでに、ヨーロッパから帰ってくる船が、神戸から横浜までほとんどガラ空きになるというんです。聞いてみると、なにしろ何十日も船旅をして帰ってくる、その日本に、はじめて入る港が神戸で、そこでたいていのひとは神戸で船を降りてしまう、というのは、神戸から先は汽車のほうがずっと早いからです。

それを聞いて、それならどうだろう、神戸から先、横浜までうちの生徒を安く乗せてくれないかと思ったのです。向うは生徒のことだから二等か三等だろうとおもったらしいんですが、私としては一等に乗せてくれと、そういったんです。まあ、どっちにしても、どうせあいているんですからよかろうということになって、たしか、神戸から横浜まで三円五十銭でいいということになりました。これは特別の大勉強の値だんだったんでしょうね。なにしろその日午前中に船に乗ると、お昼を食べて晩ご飯を食べて、船で、むろん一等船室ですが、そこで寝て、あくる朝も食べて、もう一どお昼を食べて、そうして横浜に着くんです。なにしろ当時の船の一等の料理といえ、東京あたりの相当なレストランにもまけないくらいのご馳走でしたからね。

それに船の都合では、もう一ど夜を食べることがあるんですね。というのは、ときに神戸から横浜へ直行しないで、とちゅう清水へ寄ることがあるんです。そこへ入ると、よく冷凍の魚ですか、ああいうものを積みこむ、その荷役があるためにおくれるわけです。もっともこっちはべつにおくれたってちっともこまらない、もう一回夕飯をタダで食べられるというものですから。

そういうことで、上級生の修学旅行は関西へ行く、行きは汽車で、帰りはこの外国航路の一等船室というプランをたてたわけです。

はじめてそれをやって帰ってきたときは、新聞に書かれましてね、女学生の分際で外国航路の一等で旅行するなどとは、ぜいたくもはなはだしい、というわけなんです。書いた新聞記者はまさか三円五十銭だったとはおもわなかったんでしょうね。こちら、ふうん、なにを書いている、ぐらいの気持ちで気にしませんでした、まあそれだけ世間ではめづらしかったんでしょう。

しかし毎年それをやってるうちに、だんだんとほかの学校にも実情がわかったとみえて、あちらでもこちらでもそういう計画をたてはじめたんです。そうすると船会社のほうでもたまらない、そこで、丸山さん、すまないけれども、あちらをことわってこちらだけ乗せるというわけにもいかんから、せっかくの計画だったけれども来年からはやめてもらいたいという話で、結局うちもやめました。そのかわりに九州まで行く、あるいは北海道へ行くというふうにしたわけです。

## まず母親から水に親しませようとプールをつくる計画

そのころドイツは例のカイゼル、ウイルヘルム二世という皇帝でしたが、そのひとがドイツの将来は海洋にあり、ということをおっしゃったのです。これを聞いて、日本の将来も海洋にある、とおもったのです。なにしろ四方が海に囲まれているという点では、ドイツよりもむしろ日本だし、そのころの日本は海軍もなかなか立派だし、商船の数でも世界で指おりの国だったのです。

ところがどうも国民全体をみると、海をこわがるひとのほうが多い。日本の将来を考えるとこういうことではこまる。どうかして、つぎの国民にはもっと海に親しませなければいけない。それには、まずお母さんになる人を教育して、海に親しませるのが一番だ、そういうふうに私は考えたわけです。

それで、修学旅行にも、ちょうどいい機会だから、船にのせて、たとえ、二日でも三日でも船の上で生活をさせる。それも三等や二等では人によっては、どうも船というものはいやなものだ、とおもうかも知れない。それでは逆効果ですから、快適な一等船室をあてがって、海というものはいいものだな、決しておそろしいものでもなんでもないな、という印象を生徒たちにうえつけたい、それが本当のねらいだったのです。

この気持ちはずっと前からもってましてね、学校ができたあくる年の夏休みには、まだ校舎の方はできていなかったんですが、伊豆の西海岸の三津浜というところに、臨海学校を開いてこれはその後、毎年つづけています。これもはじめは、沼津から発動汽船でいく、その船があぶないなどという父兄がありましてね、そういうことだから、ますます海に慣れる、親しませるといふことが必要だと、私はがんばってやったわけです。

しかし、この臨海学校はなんといっても有志だけですから、全部の生徒を海に親しませるといふわけにはいきません。

全校生徒を、いつも水に親しませるには、どうしてもプールをつくらなければいかんとおもったのです。いまでこそプールといえば、小学校でもいくらかありますが、なにしろ、そのころは、学校のプールといえば、東京では早稲田に一つあったぐらいで、まして女の子の学校には、そんなものは一つもなかったのです。はじめて全国で女子の競泳大会というのが開かれたのは昭和八年で、私たちの学校にプールができたのが、それより二年前の昭和六年ですから、そのころとしては、ずいぶんおもいきったことをしたもんだと、いわれたものです。

このプールを作るについては、なかなかそうスラスラとは、事ははこびませんでした。第一、そういう予算など、東京府としては一銭もありません。プールを作るんならば、どうしても寄付とか、そういうお金にたよらなければならないんです。

それに、プールといっても一体どんなものを作っていいものやら、どれくらいの幅でどれくらいの長さがいいのか、そういうことは一切わかりませんでしたので、その頃、水泳の方でもう有名だった松澤一鶴さんを突然おたずねしたのです。

私としては、屋外のプールを考えていたわけですが、松澤さんは屋外はいけないというんです。一つには、年中泳げるようにしなければならない。それには、屋外では寒くなると泳げないからダメだ。それにもう一つ、女の子がハダカになって泳ぐんだからそういう意味でも、屋外では都合がわるい、どうしても室内の温水プールにしたほうがよいと、そういう意見なのです。

それを聞いて私もなるほどとおもいました。ところが、温水プール、しかも室内ということになると、これはどうしても、手のでない金額なのです。私がそれだけのお金を持って

おるならば、それはなんにも問題はないんですが、とにかく、これからいろんな人に寄付してもらって作ろうというのですから、あまり金額が多いと、はたしてそれだけのお金が集められるかどうか、私には自信がなかったのです。

はじめからそんなことをいって、結局お金が集まらなければなんにもならない、それよりはまず屋外のプールでもいいからそれを作って、それから月日をかけてお金を集めて、室内の温水プールを作ろう、そんなふうに私は決心しました。

そうはいうものの屋外プールでも、松澤一鶴さんは、長さは二十五メートル、幅はせめて四コースはなければいけないという話でしたので、そんなふうに作ると、どうしてもその頃のお金で五万五千円以上かかるというのです。いまのお金に直すと何千万円ということになるでしょう。

あっちこっち心あたりをたずねて、無心にいったんですが骨が折れましたね。ここで百円もらうとか、あちらでやっと二百円もらうといったことで、いちばん多くだしてくれたひとで三百円でしたか。それでも六千何百円という金が集まったんです。そこで、これならもうよかろうとおもって保護者会に相談をしたというわけです。じつはこういうわけでプールを作りたいとおもう。それにはこれだけの金があるが、そのうち、いまここに七千円近く私が寄付を集めた。ついてはあと入ってくる生徒から月々いくらずつかをだしてもらえないだろうか、そういう相談をしたわけです。

## 学務部長の中止命令を無視して室内温水プールを完成

ところが、そのころ、昭和五、六年という頃は、ちょうど世の中が不景気で緊縮政策というのをとっておる、そこで父兄のなかにもそれをいって、政府もその方針なら東京の府知事もそのつもりでやっておる、その政府のもと、その知事のもと、校長がそういうゼニを使うというのはけしからんではないか、そういうんです。ところがありがたいことに、緊縮しなきゃならん世の中だからこそ、こういうものが必要なんだ、大いにやってほしいというひとがでてきたんです。そのひとのいうのには、こどもが羽田あたりに海水浴に行くとなると、お金もかかるし、そういうところへいけば、いろんな風紀上の問題もあるし、もし学校でそういうものを作ってくれるんなら大へんけっこうだ、とそういうんです。

そんなわけで、やっとりかかることになったのですが、すると府の学務部長から電話がかかってきて、あんたのほうでプールをこしらえるそうだが、それは絶対にやめてください、というんです。しかし、私はなにも府の予算を使って作るのではない、いまさらやめるわけにはいきませんと断ったんです。そして保護者会の連中にそれをいうと、それじゃあ私たちがいって話をしてやろうと、わざわざ府知事のところへかけていってくれたんです。すると知事も、それなら結構じゃないか、ということになって、とにかく知事が賛成したんだから、その下の学務部長がなんののかんのいうことはなくなったわけです。

そんなこんなでずいぶん苦労しましたがけれども、とにかく昭和六年にはできあがって、おかげで、うちの学校の生徒はみんな泳げるようになりました。なにしろ体操の時間に水泳を教えるんですから。

そののち、すぐに温水にする設備の工事にとりかかって、あくる年の夏に室内温水プールができあがったわけです。

## 選手は一切作らぬ、記録作りより全校生徒の体位向上

よく、そんなに早くから立派な室内プールをもっていたんなら、さぞお前の学校からは立派な水泳選手がでていることだろうと聞かれるんですが、私は選手を作ることは大きらいなんです。反対なんです。

たとえば、泳ぐなら泳ぐにしても、それをみんなが満足にできたらそれでいいんで、なんにも特別に選手を作らんでもいい、それに選手を作るとどうしても選手だけが運動をやりすぎる、これではいけないんです。生徒としてはうちへ帰って家の手伝いもしなきゃならんし、いつも選手でございまして学校に残っているようなことは、いけないとおもいますしね。それに選手を作ると、どうしてもほかの人間が使うのがじゃまになる、いきおいほかのひとはやらんということになるでしょう。

おかげでずいぶん、あの校長はわけが分らないって、ほかからいわれたらしいんですね。

たとえば、うちには立派なバスケのコートが二面もあるんです。それでときどき、大会かなんかにかしてくれといってくるんですが、むろん、お使いなさい、といいます。

そうって会場は貸すんですが、選手は出さないんです。せっかくあんまりっぱなコートを持っているのに選手をつくらない、そんなところでわからない校長だといわれたんでしょう。

私は運動については、そのころ、いつもこんなふうにいってました。全校の生徒が、それも思いついたときにやるんでなくて、いつもやれ、やり方はちゃんと法則通りに正しくやれ、そして、無理をしてはいかん。

だから、数人の立派な選手を作るために、ほかの大勢の人間が犠牲になるというか、やれないようなことであってはこまります。だからプールを作って生徒を泳がせるときにも、それをやかましくいったんです。記録などはどうでもいいんだ、早く泳ぐなどということはどっちでもいい、それよりも一分でも長く水につかっていられる、そういう力を養った方がいい、そんなふうにいってました。

## 多摩川の川原に農園を作って一週一度はみんな畑作り

そういえば、農園もつくりましたね。

ある日のこと、府の人がやってきましてね。ふと、多摩川の川原が七千坪ほどあいているんだが、というんです。その土地は、内務省のものですが、そりゃあ結構だ、ぜひ私の方でつかわせてもらいましょう、というわけで、そこで農園をつくったんです。

農園とって、なにしろ草ぼうぼうの川原ですから、はじめは、全校生徒がみんな石を拾ってどけて、草を抜いて、そして畑にしたんです。

こういうことは、べつに本来は学校の仕事と関係がないんですが、しかしどうしても、私としては、生徒を外の空気のいいところへひっぱり出したい、むろん月に一回、遠足はやっていますが、それでは足らんです。

校長室ですが、朝きれいにしても、部屋のすみにある洗面器、それに水がはってあるんですが、夕方になると、もうずいぶんのほこりでよごれているんですね。こんなふうですから、これは、やはり郊外の空気のいいところへ、生徒を連れていったほうがいい、とおもって、そうして農園をつくった、というわけです。

はじめは、全部の生徒で畑にしたんですが、後にはクラスべつに土地をわけましてね、そこでめいめいさつま芋とか、落花生とかそういう土地でもできるものをつくらせる、出来たものは、生徒にもって帰らせるんですが、それよりも、とにかく週に一回、交代でそ

の農園へ連れて行く、それがこっちのねらいだったわけです。

それについては、面白い話があるんです。多摩川ですから、電車にのっていかなければならん、そこで目黒から沼部まで往復三十六銭のところを十銭にしてほしいと、目蒲電車に交渉しました。すると、向うの方で、それは十銭でいいけれども、もし、ひと月に利用する人が三百人以下のときは、その差額をあんたのほうから出してくれ、つまり最低三百人は保証せよ、というわけなんですね。

そこで私は、それじゃ三百人を超えたらどうするか、とそういつてみたんです。すると、もし三百人を超えたら、その差額はあんたのほうへ返す、とこういうんですね。

なにしろ、こちらは生徒が千二百人もいるんでしょう、それが一週に一回は行くんですから、三百人なんてもんじゃないんですね、結局、毎年相当なお金を、電鉄会社のほうからもらって、それで鋤を買ったり、肥料を買ったりなんかしたんですよ。

## 大正天皇崩御の日に妙高で生徒をつれてスキーをする

あれは校長になって間もなくだったとおもいますが、「女子ニ適セル運動如何」という諮問がきましてね、私もその委員だったのですが、そのなかで、女子に不適當だという運動のなかに、スキーというのがあったんです。そのほかの運動は私はたいてい知っておるけれども、スキーについてはなんにも知らない、まあみんながいけないというからそのまま通ってしまったのですが、どうもあと味がよろしくない、自分の知らないものをいけないとかいいとかいうのは、なにか気持ちにしこりが残ったんです。

これは、自分でやってみなければならぬとおもったのです。すると、そのあくる年に、越後の高田でスキー大会というのがありました。これはいい機会だとおもって、体操の先生にたのんで連れていってもらったわけです。そこで生まれてはじめてスキーというものはいてすべってみた。ところが、これが意外にいいんです。べつにこわいこともない、それと、誰にでもすぐすべれる、それも気に入りました。どうも、スキーは女子に不適當な運動だなどという答申をしたのは大間違いだったと気がつきました。

私はどういうものか、なんでもこうだとおもったら、ぐずぐずしないですぐ実行にうつすたちです。なにかというと、ああでもない、こうでもない議論ばかりしているひがあります、そういうのはきらいなんです。

だからスキーも、これは女子にやらせても少しも危くない、いい運動だ、とおもうと、さっそく生徒にやらせようという気になりました。妙高がよかろうというわけです。

それもはじめは、保護者会にはかって賛成してもらって、いくらか補助をしてもらおうというつもりだったんですが、例によってまた反対するひがおる、スキーなどは危険だというわけです。

そこで私は、賛成してもらわなければもらわないでいいとおもって、その代り補助をもらうことはあきらめて、生徒から有志を募る、そうして、二、三の先生といっしょにでかけることにしたんです。

しかし、こうなると学校の公式の仕事ではなくなりますから、学校のある間に行くわけにはいかない、そこで十二月の休みになる二十四日の夜、上野を発って妙高へ行くことにしました。

これが、大正十五年のことです。というと古い方はきっとおもいだされるにちがいありませんが、そのころ大正天皇がご病気で、二十四日の日には、どうもご病状がおもわしくないといった状態でした。それで先生方の中には、遠慮したほうがいいんじゃないか、と



いうひともありましたが、せっかく計画したんだからというので、予定通り出発したわけです。

汽車が長野駅に着いたところ、なにかザワザワとしている、号外がでたらしいんです。聞いてみると、大正天皇がおかくれになったというのです、これはちょっとまずいことになったとおもいましたが、とにかく妙高の宿に入りました。

そういうわけですから、宿へ着いても、まさかいきなりスキーをはいてとびだすわけにはいきません。とにかく午前中は謹慎をしておいたわけですが、せっかくここまできたのだから、というわけで、午後ゲレンデにでかけていきました。そうしてゲレンデの上で、東京のほうに向かって遥拝をしまして、それからすべりはじめたというわけです。いや、私たちのほかにも、いろんなひとがずいぶんすべっていたようでした。

東京へ帰ってから、不謹慎だということになにか叱られはしないかと心配してくれたひともありましたが、べつにどうということもなかったようです。

### 男もザンギリ頭になっている女の子が断髪してなぜ悪い

校長室というところは、いろんなお客が来るものです。

暴力団みたいなのが、銭をもらいにやってくる、入学試験に受かるように、たのみにくる人もある。私はそういうのは一切、受けつけませんでした。なかには、府会議長かなにかの名刺をもって、しつこくやってくる人もありました。とうとうたまりかねて、ろくな予算もよこさないで、たのみみたいときだけ勝手なことをいいなさんな、と行ってやったこともありましたね。

話はちがうんですが、やはり校長室で、友人がやって来て、どうも僕は女の髪切ったのなどは、ヘドがでそうだと、こういうんです。

そこで私は、しかし、君も断髪にしておるじゃないか、それはどういうわけだ、と行ってやったんです。明治から、男はみんなザンギリ頭になっている、それというのが、結局そのほうが便利だからだろう。まあその通りだね。それじゃあ、女だっておんなじじゃないか、そういったら、あっけにとられたような顔をしました。

その友人が女の断髪をいいたしたのは、じつは私たちの生徒で、髪を切ってる子がずいぶん目立っていたからです。

なんでも、はじまりは、一人の生徒が断髪にしてきた、これが問題になったわけです。とんでもないことだ、という先生もありましたが、私は髪型の型などは親の勝手だ、学校でとやかきうことはない、と行って、べつに学校としては文句はいわなかったのです。それで、だんだん髪を切る生徒がふえてきて、しまいには全校生徒が髪を切るようになりました。べつにすすめはしなかったんですが、髪が長いとエリが汚れる、それに洗うのもめんどうだから、つい、不潔になる、とは考えていました。

そういえば、校長になった二年目に、洋服を校服にきめました。それにはこんなわけがあるんです。

じつはそれまで教頭をしていた、やはり府立の女学校ですが、ここでは、袂の着物に袴という明治以来の女学生スタイルだったのです。ところが、これにほとんど手を焼かされてね、というのは、一年生や二年生はそんなに問題はなかったんですが、高学年になると、どうしてもおしゃれをしたいという気持があるものだから、たとえば、着物の生地は木綿ということになっていたのです。

ところが、ませ織り程度はいいじゃないか、あるいは、木綿は質素でけっこうだけれど

も、新しく買うとなると、かえって不経済だ。古着だったら、紬銘仙でもいいではないか、というような声があって、それじゃそうしようということになる。ところが、まぜ織りといっても、絹の分量はそれならどれくらいまでをいうのか、古着といっても、いったい何度くらい手を通したら古着といえるか、そういうことがはっきりいえないんです。

そこへもってきて、袴をはくのはいいけれども、とにかく胸高にはきたがる、しかも、きつく結ぼうとする。これは体にわるいからやめさせたいのだが、それでは一体、どの辺までの高さならいいか、これを規則としてきめるのは非常にむづかしいことになってきます。

結局のところ、きまりはあるにしても、じっさいはみんな銘仙をきてくるし、なかには糸織縮緬をきてくる子もいる。袴も色とりどり、それを胸高にきつく締めて、結んだヒモを花のようにたらず、といったことが平気で行われるようになっていたんです。

こういう問題を一挙に解決してしまうには、洋服にするより仕方がない、私がいつか校長になったら、制服は洋服にしておもうと、そのときから考えていたわけです。

そんなわけで、校長になったすぐに、校服をつくろうというわけで、専門家にたのんで、こちらの希望をいってデザインしてもらいました。これが、まあ、日本では女学校の校服のはしりみみたいなものかもしれません。

## 校服だって服装は便利さが第一、よけいな飾りはムダ

私のいった希望というのは、なるべく脱ぎ着に便利なものにしてくれ、ということでした。服装というものは、便利なのが第一だ、と私は考えています。じつは、校長をしている間、ほとんど私は詰襟服でとおしましたが、それというのも、いつか南洋群島へ視察にいったとき、その海軍の軍人の暮らし方をみていて、どうも我々の服装にくらべてずっと便利だ、ということに気がついたのです。

いざ出かけるというとき、軍人はそのまま上着をひっかけていけばすみませんが、我々のほうはやれワイシャツだ、やれカラーだ、カフスポタンだ、ネクタイだ、と大騒ぎをしなきゃなりません、手間も大へんだし、手入れもめんどろです。

そこで、内地へ帰ってからは、詰襟服ですっと通してきたんですが、そのために、よく小使いと間違えられましたね。しかし、人は服装で判断するものではない、中身で判断するものだ、とおもっていましたが、べつに少しも気にはしませんでした。

そんなふうでしたから、校服をきめるときも上着とスカートと別々では、やはり不便で、すぐに着られて、すぐ脱げるようなものの方がいいと考えました。その点では、ジャンパースカートというのですか、スカートに胸あてがついていて肩でとめるようにする、それをはずせば、スルッと下へぬげてしまう、そういう型がよかろうといったのです。

下に白いブラウスを着て、そのジャンパースカートを着る、冬になって寒ければ、その上に上衣を着る、そういったデザインができ上ってこれが最初の校服になったわけです。

ところが、どうも専門家というのは、いろんなよけいなことをするもので、最初の服は、胸にネクタイがついている、それから、バンドもついている、胸のへんにも、なにか飾りボタンが三つほどついていた。

個人の服なら、どんな飾りがついていてもいいようなものですが、校服となるとこういうことはこまるんです。たとえば、その飾りボタンにしたって、落ちることもある、そうすると、つけなければならぬ、ついなにかのことでつけ忘れる子もいる、そうすると学校としては、校服である以上、ボタンが一つ落ちている子には、注意をしなければならぬ。胸のネクタイにしても、どういう布地にするか、どういう長さにするか、そんなことに神

経をつかわなければならぬ。さっきいったように、これは前の学校でさんざん苦勞してきたことだし、ネクタイや飾りボタンやバンドなどというものは、便利さという点では、むしろ邪魔なものである、そう考えたのです。

そこで、そういうものは、いっさい取ってしまいました。体操の時間なんか、じつに便利でよかったですよ。その白いブラウスの下に、ブルマースをはく、その上からジャンパースカートををはいて学校に来るんです。体操の時間になると肩のホックをはずせば、そのまま下にスカートがおちる、わざわざ、どこかへ行って着かえるなどという煩わしさがはぶけるといふものでした。

そのジャンパースカートも、背中はおもい切ってうんと開けて、これは涼しいように、そして一つには、それだけ布地が節約になるように考えたのですが、幸いこれがほかの学校でも評判で、あちらこちらの学校で真似をしたようにおぼえています。

## 教育とは設備である、最高級の教材を、生徒の数だけ

なにしろ、できたばかりの学校でいろんな教材や設備がいります。そこで、私は先生方に、必要なものならばたとえ金がかかってもそろえようじゃないか。その代り無駄なもの、理屈に合わないものには一銭もださない、いつもそんなふうにいっていました。

あるとき、校長室に呼鈴をつけようということになったのです。しかしそれはやめさせました。呼鈴というものは、ひとを呼びつけるための道具だ、もし校長が先生方に用があれば、私のほうから出向いていく、先生方が校長に用があれば、先生方のほうからやってくる。それでいいんだ、呼鈴というものは無駄だ、そういったのです。

学校では生徒が直接自分で手にとって勉強しなければならない道具がたくさんあります。ことに女学校では家事の方面など、たとえばミシンにしても料理道具にしても、先生がやるのをそばで見ているようでは、これはなんにもなりません。

そのころ一クラス四十八人でしたから、少なくとも四十八人をいつも頭に入れて数をそろえるように、できたら二学級分九十六人が一度にやれるようにしたいと考えていました。

そんなわけで、たとえば料理室にしても、ガスも水道もそれからお湯も四人一組でできるだけの設備をしましたし、ミシンも一人に一台は当るようを用意しました。そのミシンも当時はシンガーかノーマンかといわれていましたが私はどうも、ドイツのノーマンのほうがいいとおもって、それを主に、あと少しシンガーを買ったようにおもいます。

これはなんにも家事に限ったことではなく、たとえば顕微鏡でも、はじめに二十五台一どに買ったわけです。生徒が四十八人ですから二人に一台として二十四台、それに先生の分を入れて二十五台というわけです。

ところが、しばらくして新しい博物の先生がやってきました。この先生が、校長、顕微鏡を買って下さい、というんです。顕微鏡は君、二人に一台ずつあるじゃないか、というと、数も大事ですが質も大事です、いまある顕微鏡、あんなものじゃ仕方ありません。ドイツ製のを買って下さいというのです。なるほどとおもって、結局ドイツ製のに買いかえたことがありました。

地理の先生が世界地図の大きいのを買ってくれといひます。よかろうというと、校長、しかし日本製のはいい加減で駄目です。やはり外国製のを買って下さい、これも、よかろうといひました。値だんは、何倍もちがったんですが。

センタク室も、ほかの学校からよく見学にきたものです。当時としては珍しかったのでしょう。大きな電気洗濯機、それにクリーニング屋で使っているような脱水機、そして電

気で動かす乾燥室までもっていたんですから。

そういえば猫の皮もたしか五十枚ぐらいあったようです。これは例のエポナイトの棒でこすって電気を起こさせるための教材ですが、万事がそんなふうでした。おなじやるんならばちゃんとしたことをやろう、おなじ買うんならば一級品を買おうというのが、私のやり方だったのです。

学校ができると、どうしてもピアノがいる、ピアノならなんだっていいだろうという考えのひともあったようでしたが、私はさっそく上野音楽学校へでかけて行って、いまいちばんいいピアノはなにかと聞いてきたのです。スタインウェイだといわれたので、さっそくこれを買うことにしたのです。もちろんそんなお金があるわけはなくて、これも無心にいったわけですが、めざす相手が、いくらぐらいだと聞くので、五千円余りだといひますと、即座に小切手を書いてくれたので、びっくりしたおぼえがあります。

なんだか、こんなことをお話ししていると、手前みそばかり並べて自慢しているようにおもわれるかもしれませんね。しかし私ももう九十で、いまさら自慢をして功名顔をする気など、少しもありません。ただ、おたずねになるままに、おもいだしたことを、ありのままにお話ただけのことです。

●丸山丈作氏は、明治八年新潟県に生れ、三十五年東京高師を卒業、福井師範の教諭をへて、四十一年東京府立第三高等女学校に奉職、ここに十五年勤務して教頭であった。大正十二年府立第六高等女学校が新設されるにあたって、初代校長となり、以来十八年間その職にあった。したがって同校の校風は氏に負うところ甚だ大である（現在三田高校）。昭和十六年、六十七才でその職を辞した。その後トキワ松学園の校長理事長となったが、三十年退職。以来神奈川県伊豆山に住んで今日に至っている。本年九十才（掲載当時）

参考／「暮らしの手帖第1世紀 77号」（1964年）より  
暮らしの手帖社 HP <http://www.kurashi-no-techo.co.jp/>